

放し、より広い「デザイン」の認識を植えつける結果となった。當時はデザインという言葉は洋裁の方面で使われていただけで、工芸分野での使用が一般化するのには第二次大戦以後だが、図案部ではこの改革の頃から盛んに使われ始めた。そして、生徒たちはデザインとは何かという新たな問題意識を持って勉強に取り組み、そこに戦後新しいデザイナーたちが活躍する基盤が作られた。しかし、新鮮な発想、現代生活に即応したデザインということに重点を置いた教育改革は良い結果をもたらしたとする意見に対して、改革以後、古めかしい指導法ながらも生徒に日本の伝統を深く学ばせることによって基礎的な力をつけさせ、それを土台にして各自新しい方向を開拓させるという島田時代の基本の方針が崩れたこと、あるいは生徒一般に巧緻な表現技術を欠く傾向が生じたことを批判する意見もある。

四、夏季休業中の教室使用禁止

昭和七年六月二十二日、和田校長は主任、理事、教授会議を開き、その決議に基づいて夏季休業中の生徒の教室使用を禁止することとし、同二十四日、各教員に通達した。例年、夏休み中は秋の官展出品を目ざす生徒たちが教室を借りて制作に邁進するのが常であったが、和田校長は前出の「かく信じ、かく行ふ」の主旨に基づいて断乎これを禁止した。これに関連して翌八年には「生徒心得」を改正し、生徒の展覧会出品を制限する措置もとられる。

⑨ 海野清の在外研究

金工科教授の海野清は、昭和七年六月一日、文部省より金工技術研究の為、満一年間フランス在留を命じられ、帝展審査を了えて十月十八日に東京を出発。同九年一月十四日に帰朝した。

海野清は海野勝珉の四男として明治十七年に東京に生まれ、早稲田大学法科中退後、同三十九年、本校金工科に入学。叔父の海野美盛（水戸派）と清水南山（加納派）に師事した。大正六年に本校金工科助手、同八年に助教に任ぜられ、昭和七年三月に教授となった。中野政樹「海野清・人と作品」（『人間国宝シリーズ 28 佐々木象堂／海野清／魚住為楽』昭和五十四年、講談社）によると「プロフェッサーと呼ばれるまで外国に行かないよ」とつねづね言っていた海野は、教授となった年に渡欧した。教授であったためにルーブル博物館、大英博物館、エジプト博物館等でも、一つ一つ手にとって調査研究することができた（海野重男氏談）という。滞欧中の足跡については未詳だが、目的は、フランスを中心に西欧の金属工芸の技法を研究することにあつた。彼は元来、水戸派彫金の正統な継承者で、特に毛彫の技法に秀でていたが、この留学により西欧技法を採り入れ、また技術面以外に、金属工芸の理論家としても完成されて行くことになる。帰国した年の帝展出品作品「青銀花器」は、胴の左右にスカラベを打出した鍔付、中央にロータスの花をあしらったもので、古代エジプト芸術の影響を強く受け、西欧の造型と日本の伝統技術がよく融合して新しい日本工芸の傾向を示したものと評価された。

⑩ 「天心岡倉先生」の寄贈

昭和七年十月、ハーヴァード大学フォッグ美術館より本校へ下村観山筆「天心岡倉先生」(紙本淡彩、掛幅装)が寄贈された。『東京美術学校校友会月報』第三十一巻第五号の口絵にその写真が掲げられており、また、矢代幸雄が同誌に次のような解説を寄稿している。

下村観山筆「天心先生像」に就いて

矢代幸雄

今回米國ハーヴァート大學より下村観山筆「天心先生像」の寄贈を受けたが、その寄贈の次第とこの繪の成立とに就き説明を試みたいと思ふ。

この繪はもとラングドン・ウオーナー氏の所有であつた。同氏はハーヴァート大學附屬フォッグ美術館の東洋部長であるが、岡倉先生の弟子で、先生が英文の著作をされる時手傳ひをしたりした人である。國寶帳の英譯もこの人の手助けにより成つてゐる。そして同氏は度々日本に來たこともあり、下村観山氏とは親交があつた。「天心先生像」は觀山氏がウオーナー氏に與へたものである。ウオーナー氏はこの繪が日本美術界にとつて意味深いものであるから日本に送りたいといふ希望を持ち、嘗て之を觀山氏の令息にも自分にも漏らしてゐた。昨年岡倉由三郎氏が日本美術展覽會のことで渡米された際、この繪を日本の何處に贈るべきかに就いてウオーナー氏より相談を受け、岡倉先生が創立された日本美術院にすべきか、又初代校長として勤務され現在立派な銅像も立てられてゐる東京美術學校にすべきかゝ問題となつたが、結局本校に寄贈されることになつた。實際はウオーナー氏個人の寄贈で

あるが公式にはフォッグ美術館東洋部の名になつてゐる。

次にこの繪の成立であるが、この繪は大正十一年日本美術院再興第九回展覽會に觀山氏により出品された岡倉先生の肖像の下繪である。従つて岡倉先生歿して十年後の製作になるので寫生ではない。然るにこの展覽會出品の繪は大正十二年の震災當時日本美術院の辰澤延次郎氏の所にあつて焼けてしまつた。觀山氏は之を甚だ遺憾とし、焼けた繪の草稿を取出し筆を入れ彩色を施して幅にした。現在では單に草稿ではなく、完成された繪となつてゐる。これが今度寄贈された「天心先生像」である。この繪に於ては觀山氏が自分の傾倒してゐた岡倉先生の面目を躍如たらしめん爲、先生の風貌習癖等を寫して遺憾のない事が見られる。左手で煙草をのみながら鬚を捻る所や、書き物をする際紙を斜に置く等も先生の癖であつた。着物は道服であるが先生がさる道士と支那で議論をされた時贈られたもので、故人の愛用されたもの、道士の間にある階級を表はしてゐる。帽子は黒紗で、丸い部分は羅紗に文様を縫取したもの、又下の青い部分は翡翠に龍を毛彫したものである。展覽會に出品された繪とこの繪と違つてゐる點は彩色に於て後者が淡彩である上處々前者と配合の上に相違を見るのと、机上の巻紙には前者には何等文字を持たないが、後者には岡倉先生自筆の文字がある。この巻紙の字は觀山氏に宛てられた先生自筆の手紙を、觀山氏が巧みに切貼りしたものである。觀山氏が平家物語の繪巻を描かうと試みたことがあつたが、これは岡倉先生がその筋書を書いて下さつた時の手紙である。觀山氏は岡倉天心、狩野芳崖、橋本雅那邦の三氏を三恩師とし、三人の肖像像を描

いて後世に残したいと念じてゐたが、芳崖のは全く出来ず、雅邦のは草稿だけ出来、天心先生のは今回寄贈された繪のみ残ることゝなつたのである。

(本文は十月十八日矢代教授が都下各新聞記者を集めて「天心先生像」につき説明せられたのを筆記したものである。新「規矩男」)

① 学生思想取締り強化

昭和七年、本校は生徒の左翼思想取締りを俄かに強化して該当者の大量処分を実施した。その最初は一月二十六日の図画師範科三年生田中儀蔵の論旨退学決定である。この田中の逮捕、退学および為人などについては宇佐美承著『池袋モンパルナス』(平成二年、集英社)にも記述がある。

田中儀蔵は昭和四年にトップで図画師範科に入学し、成績優秀、向学心旺盛で、周囲の信望を集めた生徒であった。二年後輩の上野誠も「美校時代に人間的にも思想的にも影響を受けたのは田中義三〔儀蔵〕さんです。秀才で情味のある人で魅力的な、みんなの憧れの的のような人でした。」(プロレタリア美術運動史資料(一))『形象』第五号。昭和三十七年三月)と述べている。田中は一年生が終る頃、先輩に勧められて共産主義青年同盟に加わり、活動を始めた。図画師範科生は将来教職に就くため本科生よりも素行を厳しく監視され、品行方正、身体健全、成績優秀が条件とされていたが、そうした制約とは裏腹に当時は左翼思想に共鳴する者が本科以上に多く、彼らは、本科生たちが主にプロレタリア美術運動との関連の上で活動し

たのに対して、教育関係の左翼団体との関係が深かった。田中はその中心人物であり、そのため警察にマークされ、卒業を目前に控えた昭和七年一月のある日、教育実習に行くため級友たちと校門を出たところで逮捕された。彼が二十九日間の拘留を終えて出て来たときには既に論旨退学処分が決定(実施は同年三月)されていた。

この田中の逮捕は非合法組織の共産主義青年同盟員としての活動ということが理由であったが、本校の処分の理由はそうした左翼活動の外にもう一つあったことが、次の文書から分かる。

生徒処分ニ關スル申請

圖畫師範科三年 田中 儀蔵

右者昭和六年十二月四日師範科在學生ニ對シ不穩ナル行動ヲトリ生徒トシテノ本分ニ背戾シ且ツ別項記スガ如キ過激ナル思想的背景ヲ持チテ實際運動ニ携リタル事實顯著ナルニ付本校規則第二十二條ニ依リ除名相成度此段申請仕候也

圖畫師範科主任 平田 榮二(印)

東京美術學校長正木直彦殿

記

圖畫師範科三年 田中 儀蔵

右者昭和四年五六月頃(當時圖畫師範科二年)ヨリ社會科學ノ研究ニ興味ヲ持チ始メ昭和六年四月中旬R・Sニ加盟シ次イデ同年六月下旬細胞組織ノ一員トナリ自宅其他數個所ニ於テ屢々研究會、細胞會議等ヲ開催シ偶々錦巷會ノ内紛起ルヤ錦巷會擁護同盟ト聯絡ヲトリテ昭和六年十二月四日師範科在學生ノ大部分ヲ上野